筑波學生新聞

発行所
筑波大学学生新聞会
編集代表
奥村哲也
〒305 茨城県新治郡桜村天久保
3-8-13高野ハイツA-105
TEL 0298(52)4460
振替 宇都宮6-31450
月刊 価格100円

企画リストは提出せずか

83学園祭

十月八・九・十日の三日間開催される学園祭（秀峰祭）に向けて、三二〇名編成を目指す、第四回学園祭委員会（委員長斎藤研太郎3年）が発足した。委員会は、「基調案」を作成した。さらに学園祭は、この「基調案」に基づき、実行計画書は、学生側が提出する。「基調案」は九月一日から学生による討論が始まり、今後の動向が注目される。

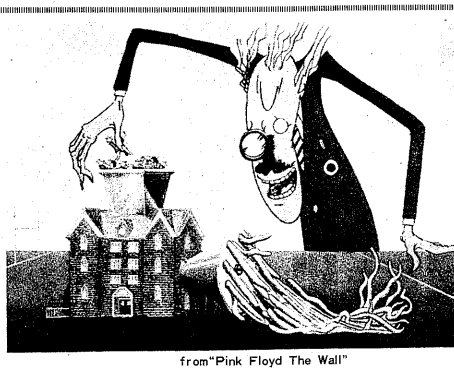
「基調案」では、はじめに、企画を行う規利とそのための義務の双方を持つ四つの目的を掲げ、①自主運営を目指す、②参加者の、関係を築く、③利益を生む、④の義務の基本方針、四つの動員計画を掲げている。基本方針は①全員参加、②分科とし、③各代会決定、④学園祭の、四つ。

「基調案」では、この「基調案」を受けて、各代会は、「企画リスト」を提出し、学園祭実行委員会に提出し、学園祭実行委員会に提出する。

「基調案」では、この「基調案」を受けて、各代会は、「企画リスト」を

10周年特集1

科学万博とその問題点



from"Pink Floyd The Wall"

筑波大学で建築、科学万博に対して厳しい批判を展開し続み、最近では科学万博相談所の代表に就任された吉岡斉氏に、科学万博の問題点について、筑波大学の対外学生モニターレーションの場とかこの科学万博に、我々は無関心ではいられない。大イヴニングの「素顔」を考えるため、吉岡斉氏に御登場いただいた。

吉岡斉（よしおかひとし）氏、科学史・科学技術学専攻、一九五三年生まれ。一九七六年東京大学理学部物理学科卒。一九八二年同大学総合文化研究科修士課程修了。現在学術情報センター勤務。専門分野は科学技術思想。著書に『科学技術と現代社会』（岩波新書）、『クライシス』など科学技術関係の著作多数。

提示できない技術立国の思想

警戒される技術開発による国際競争力

科学万博のわかりにくさ

一九八五年三月一七日より半年間にわたって、国際科学技術博覧会（以下、科学万博と略称する）が開催されることになっている。何月何日から始まるかについて、正確に覚えられる人は、あまり多くないかも知れないが、科学万博が日本で開かれるということを知らない日本人は、ほとんどいないであろう。世界博覧会（略称万博）は、一九八〇年代前半に、日本の国内で開かれることになっている。例えば、昨年暮に発表された日本政府の「科学技術白書」（昭和五七年版）にも、この問題は一箇所もあらわれていない。しかし、技術立国を標榜するのであれば、科学万博には、それなりの理由があるはずである。一九八〇年代前半に、日本で万博を開催することの意味を、国際的に理解できるような、説得力のある理由がなければならない。

筑波科学万博のわかりにくさは、そもそもナショナル立国と、一八八〇年代以来、政治・経済・文化の三つの面で、欧米諸国に追いつき追い越すことを目標にしてきた日本の歴史的な特徴を、ほとんどの人が忘れてしまっていることに、原因があるのではないか、と思う。

一八五三年、ペリーの来航以来、日本は、欧米諸国に追いつき追い越すことを目標にしてきた。一八五七年、初めてロシアと国交を結んだ時、幕府の使節団は、ヨーロッパ諸国の国家元首に対して、「開国」は、国家間の対等な関係であり、日本は、欧米諸国と同じ文明国であるから、国家元首の会見の際、日本の使節は、国家元首と同じ椅子に腰かけることを要求する、と主張した。ペリーの来航以来、日本は、欧米諸国と同じ文明国であるという、国際的な地位を獲得するために、国家間の対等な関係を、国際的に認めさせるための、外交的な努力を、ずっと続けてきたのである。

十周年特集2 夢見るころを過ぎても

変わるカリキュラム 変わらぬ許可制

筑波大学が十月一日に開学し開年を迎える。これを機に「筑波大学十周年誌」「十周年志学会誌」「志学シンポジウム」等々、十周年関連誌が編いされようとしている。この十年間学生が何考え、入学に対してどのように悩んだか取り上げられることがあったのだろうか。何故なら、この大学における学生は「管理」の対象であり、指導・助言関係で、「学生指導」とされた学生の問題が許容されるのだ。学生と管理の関係は、学生と教官、「学生指導」と教育・研究の関係、「学生指導」と学生の自治、学生と教官の関係、学生と職員の関係、学生と学生の関係、学生と社会の関係、学生と大学の関係、学生と筑波大学の関係、学生と筑波研究学園都市の関係、学生と筑波研究学園都市の関係、学生と筑波研究学園都市

十周年特集3　来たるべき「大学論」のために

十周年によせる声

十周年特集として、茨城県民（和光大学教授）、陣屋慎民（筑波大学社会学系教授）、三田秋民（桜村村会議員）、片岡修民（ライブハウスククロ出店）に、筑波大学に関して、それぞれ思うところを語ってもらった。

筑波は矛盾の結晶体

生越　忠

七三年秋のオイルショック以来、経済成長は鈍化なしで、日本経済が急速に低成長期に入った。以降、毎年、国として様々な問題が顕在化してきた。公害問題、福祉問題、教育問題、高齢化問題、産業構造の転換、経済摩擦、円高問題、貿易問題などと、産業社会に対する、様々な問題が噴出してきた。

ところが、これらの問題は、いずれも、従来の大学の思い出を、なおざりにする雰囲気からうんぬん問題、発展期には、公害問題、福祉問題、教育